

特 別 講 演

「昭和元禄と葉隠」

佐賀新聞論説委員長 河村健太郎

401講義室
13:00～13:55

参考資料

葉 隠 抄

武士道というは、死ぬ事と見付けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわって進むなり。図に当たらぬは犬死などという事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし。二つ二つの場にて、図に当るようにわかることは、及ばざることなり。我人、生きる方がすきなり。多分すきの方に理が付くべし。もし図にはずれて生きたらば、腰抜けなり。この境危うきなり。図にはずれて死にたらば、犬死気違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。毎朝毎夕、改めては死に死に、常住死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果すべきなり。

(1・2)

修行に於ては、これまで成就という事はなし。成就と思う所、そのまま道に背くなり。一生の間、不足不足と書いて思い死にするところ、後より見て、成就の人なり。純一無雑に打ち成り、一片になる事は、なかなか、一生になり兼ねべし。まじり物ありては、道にあらず。

(1・139)

少し魂の入りたる者は、利欲を離るると思ひて、踏込んで奉公せず、「徒然草」「撰集抄」などを楽しみ候。兼行・西行などは、腰抜、すくたれ者也。武士業が成らぬ故に、ぬけ風を拵たるもの也。今にても出家、極老の衆は、学びても然る可く候。士たる者は、名利の真中か地獄の真中に駈入りても、主君の御用に立つ可と也。(2・140)

忠の不忠の、義の不義の、当介の不当介など、理非邪正の当りに心の付くがいや也。無理無体に奉公に好き、無二無三に主人を大切におもへば、夫にて澄むことなり。(略) 理の見ゆる人は、多分少しの所に滞り、一生をむだに暮し、残念な事なり。まことにわずかの一生なり、唯々無二無三がよきなり。二つになるがいやなり。萬事を捨てて、奉公三昧に極りたり。忠の義のと言ふ。立ち上りたる理屈が返す返すいやなり。

(1・195)

端的只今の一念より外はこれなく候。一念一念と重ねて一生なり。ここに覚えつき候えば、外に忙しき事もなく、求むることもなし。この一念を守って暮すまでなり。

(2・17)

武士の子供は育て様あるべき事なり。先ず、幼稚の時より勇気をすすめ、初にもおどし、だます事などあるまじく候。幼少の時にても臆病気これあるは一生の疵なり。親に不覚にして、雷鳴の時もおじ気をつけ、くらがりなどには参らざる様に仕なし、泣き止ますべきとて、おそろしがる事などを申し聞かせ候は不覚の事なり。また女夫仲悪しき者の子は不孝なる由、もつもの事なり。鳥獣さえ生れ落ちてより、見なれ聞きなるる事に移るものなり。

また、母親愚にして、父子仲悪しくなる事あり。母親は何のわけもなく子を愛し、父親意見すれば、子のひいきをし、子を一味するゆえ、その子は父に不和になるなり。

(1・85)

侍は人を待つに極り候。何程御用に立つべしと存じ候ても、一人武篇はされぬものなり。金銀は人に借りてあるものなり。人はにわかになきものなり。かねてよく人を懇に扶持すべきなり。

(1・132)

時代の風というものは、かえられぬ事なり。段々と落ちさがり候は、世の末になりたる処なり。一年の内、春ばかりにても夏ばかりにても同様にはなし。一日も同然なり。されば今の世を、百年も以前のよき風になしたく候ても成らざる事なり。されば、その時代時代にて、よき様にするが肝要なり。昔風を慕い候人に誤あるは此処なり。

(2・18)

人間の一生まことにわずかの事なり。すいた事をして暮らすべきなり。夢の間の世の中に、すかぬ事ばかりして苦を見て暮すは愚なることなり。この事は、悪しく聞いては害になる事故、若き衆などへ終に語らぬ奥の手なり。我は寝る事が好きなり。今の境界相應に、いよいよ禁足して寝て暮すべしと思うなり。

(2・85)

貴となく賤となく、老となく少となく、悟りても死に、迷いても死す、さても死ぬ事かな。我人、死ぬという事知らぬではなし、ここに奥の手あり。死ぬと知っては

るが、皆人死に果ててから、我は終りに死ぬ事のように覚えて、今時分にてはなしと
思うて居るなり。はかなき事にてはなきや。何もかも益に立たず、夢の中のたはぶれ
なり。かように思いては油断してはならず。足もとに来る事なるほどに、随分精を出
して、仕舞うはずなり。(2・55)

一生の間修行に次第があるなり。下位は修行すれども物にならず。我も下手と思い、
人も下手と思うなり。この分にては用に立たざるなり。中の位はいまだ用には立たざ
れども、我が不足目にかかり、人の不足も見ゆるものなり。上の位は我が物に仕なし
て自慢出来、人の褒むるを悦び、人の不足をなげくなり。これは用に立つなり。上々
の位は知らぬふりして居るなり。人も上手を見るなり。大方これまでなり。この上に、
一段立ち越え、道の絶えたる位あるなり。その道に深く入れば、終に果もなき事を見
つくる故、これまでと思う事ならず。我に不足ある事を実に知りて、一生成就の念こ
れなく、自慢の念もなく、卑下の心もこれなくして果すなり。(1・45)

酒盛の様子はいかうあるべき事なり。心を付けて見るに、大方呑むばかりなり。酒
という物は、打上りきれいにしてこそ酒にてあれ。気が付かねばいやしく見ゆるなり。
大かた人の心入れ、たけだけでも見ゆるものなり。(1・23)

奉公人に疵のつく事一つあり。富貴になりたる事なり。逼迫にさえあれば、疵はつ
かざるなり。(1・56)

三十年以来風規打ち替り、若侍どもの出会いの話に、金銀の噂、損得の考え、内証
事の話、衣裳の吟味、色欲の雑談ばかりにて、この事なければ一座しまぬ様に相聞え
候。是非なき風俗になり行き候。(1・63)

人に意見をして疵を直すというのは大切な事、大慈悲、御奉公の第一にて候。意見
の仕様、大いに骨を折ることなり。人の上の善悪を見出すは安き事なり。それを意見
するも安き事なり。大かたは人の好かぬいいにくき事をいうが親切のように思い、そ

れを請けねば力に及ばざる事というなり。何の益にも立たず、人に恥をかかせ、悪口
すると同じ事なり。我が胸はらしにいうまでなり。意見というは、まずその人の請く
るか請けぬかの気をよく見わけ、入魂になり、此方の言葉を兼々信仰ある様に仕なし
候てより、好きの道などより引き入れ、いい様種々に工夫し、時節を考え、あるいは
文通、あるいは暇乞いなどの折か、我が身の上の悪事を申し出し、いわずしても思い
当る様にか、まずよき処を褒め立て、気を引き立て工夫を碎き、渴く時水呑む様に請
け合せ、疵直るのが意見なり。殊の外仕にくきものなり。年来の曲なれば、大体にて
直らず。我が身にも覚えあり。

(1・14)

キリストのまねび

今日、不覚悟ならば、明日は何と覚悟すべきぞ。明日は不定なり。今宵の明くべき
ことを、何と知りたるとぞ。

常に臨終を目の前にもち、毎日、死すべき覚悟をなす者は、果報者なり。人の死す
るを見る事あらば、われもその道を行かんと観ずべし。朝には夕べに至らんとする事
なかれ。夕べには、また朝を見んと約束する事なかれ。かるが故に、常に覚悟して居
べし。不覚悟なるとき、しごきたらざるように、身をよく修めよ。

所詮、人の終りというは死するなり。一命は、かげの如く過ぎ去るなり。死しての
ち、たれか汝の事を思い出し、たれか汝のためにデウスを頼み奉るべき。